



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構



人間文化研究機構
基幹研究プロジェクト

第30回
人文機構
シンポジウム

海の向こうの

日本文化

—その価値と活用を考える—



◀ 国際日本文化研究センター所蔵

平成29年6月3日[土]

13:30~16:30(開場13:00)

会場 ◆ 九州大学西新プラザ
福岡市早良区西新2-16-23

アクセス ◆ 地下鉄「西新」駅下車、⑦番出口より徒歩約10分

主催 ◆ 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

後援 ◆ 文部科学省、九州大学

参加料 ◆ 無料(要事前申込 定員200名)

手話通訳付

講演1 オランダ人と平戸との出会い

講演2 海を渡った切支丹禁教文書1万点の可能性

講演3 シーボルト・コレクションの長崎くんち衣裳

講演4 ニッケイ社会で生み出された資料から見た
日本の言語文化

Program

- 13:30 開会
趣旨説明 稲賀 繁美(国際日本文化研究センター 教授)
- 13:45 講演1 オランダ人と平戸との出会い
—ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用—
フレデリック・クレインス(国際日本文化研究センター 准教授)
- 講演2 海を渡った切支丹禁教文書1万点の可能性
—バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用—
大友 一雄(国文学研究資料館 教授)
- 講演3 シーボルト・コレクションの長崎くんち衣裳
—ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—
澤田 和人(国立歴史民俗博物館 准教授)
- 講演4 ニッケイ社会で生み出された資料から見た日本の言語文化
—北米における日本関連在外資料調査研究・活用—
朝日 祥之(国立国語研究所 准教授)
- 15:20 パネルディスカッション
パネリスト:岩崎 義則(九州大学 准教授)
佐藤 晃洋(大分県文化課 課長)
佐野 真由子(長崎県立大学 教授)
河野 まゆ子(JTB総合研究所 主任研究員)
稲賀 繁美(国際日本文化研究センター 教授)
- 16:30 閉会



Access

福岡空港から地下鉄「姪浜」行き乗車 約20分
博多駅から、地下鉄「姪浜」行き乗車 約15分
→いずれも、「西新」駅下車、⑦番出口より徒歩約10分
プラザ本館へは正面玄関(樋井川沿い)より、入館いただけますようお願いいたします。

[駐車等]

違法駐車は近隣の皆様のご迷惑になりますのでご遠慮願います。
公共の交通機関を利用させていただきますよう、お願いいたします。



海の向こうの日本文化

— その価値と活用を考える —

日 時：平成29年6月3日（土） 13:30～16:30（開場 13:00）
会 場：九州大学西新プラザ
主 催：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
後 援：文部科学省、九州大学

ごあいさつ

このシンポジウムは、人間文化研究機構（人文機構）が行ってきた「在外資料」にかかわる研究プロジェクトが明らかにした成果をお伝えするものです。「在外資料」とは、過去のある時代に国外に持ち出された文書や絵画、生活用品などをいいます。そのほとんどのものはすでに失われていますが、なかには博物館などに保存されているものや、または好事家の手により大切に保存されてきたものなど、今に伝わる貴重な資料が多数あります。

これらはその時代の日本の文化や人々の暮らしの様子を今に伝える貴重な資料で、研究の価値があります。日本とその国の関係を知るよすがともなります。日本が海外の人びとからどのようにみられてきたか、みられているかを知る貴重な資料ともなります。

人文機構では、機構を構成する6つの機関の研究者が各地の大学と連携して4つの研究グループを構成し、在外資料の発掘・探索や研究を行うとともに資料のデータベース化や展示など可視化の作業を進めてきました。さらに、可視化された資料を教材にしたり地方創生に役立てるなど活用に向けた作業を精力的に進めてきました。研究はまだ道半ばですが、これまでの成果を、人文機構シンポジウムという形でご覧に入れようと思います。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構（人文機構）

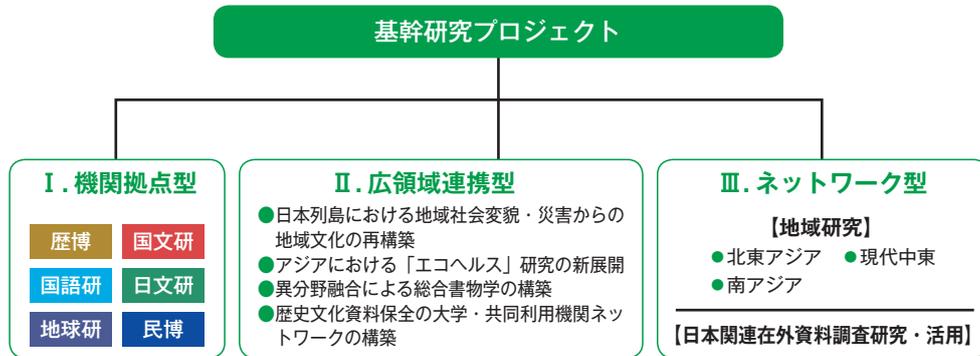
大学共同利用機関とは、個別の大学では維持が困難な大規模な施設設備や膨大な資料・情報などを国内外の大学や研究機関などの研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関で、全国に17あります。これらは、平成16年に設置された4つの法人（大学共同利用機関法人）に所属しています。

人文機構はそのひとつで、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館の6つの機関で構成されています。人文機構は、これら6つの研究機関が独自の研究を進めるとともに、学問分野間の垣根を越えて相補的に結びつき、自然環境を含む人間文化の研究を推進します。



人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人文機構は、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代社会が抱える諸問題の解決につながる17本の「基幹研究プロジェクト」を平成28年度に開始しました。それらの研究成果は、出版、データベース、映像及び展示などの方法で学界や社会に広く還元するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画です。



人文機構シンポジウム

人文機構は、大学や研究機関とも連携しながら、人間文化に係る最新の研究成果をもとにしたシンポジウムを開催しています。人文機構が持つ資料や研究成果を広く社会に公開・還元し、市民のみならず人間文化に関心をもつ研究者との交流と相互理解を促進します。今回のシンポジウムでは上記の基幹研究プロジェクトの中の「在外研究」の成果をまとめて発表します。なお、研究グループはどれも九州にゆかりが深く、初めての試みとして博多で開催することにしました。今後も地方開催を積極的に進めます。

過去2年間の人文機構シンポジウムのテーマと開催場所

第26回	苦悩する中東	H27. 4 .25	早稲田大学 井深大記念ホール（東京）
第27回	没後150年 シーボルトが紹介した日本文化	H28. 1 .30	ヤクルトホール（東京）
第28回	妖怪空間 —でそうな場所—	H28. 6 .11	有楽町朝日ホール（東京）
第29回	和食文化の多様性 —日本列島の食文化を考える—	H28. 10 .15	味の素グループ高輪研修センター（東京）

海の向こうの日本文化 — その価値と活用を考える —

国際日本文化研究センター 教授、事業統括組織責任者 稲賀 繁美

シーボルトが日本で収集し、ヨーロッパに持ち帰った膨大な美術工芸品など、海外の研究機関等には多くの日本の歴史的資料が収蔵されている。人間文化研究機構では、これらの資料の調査研究を推進し、その研究成果の活用を促進させるため「日本関連在外資料調査研究・活用事業」（以下、「在外資料事業」）を実施している。今回のシンポジウムでは、在外資料事業のなかから九州各地に関係する研究成果を紹介する。そして、地域における教育への活用や新たな観光資源の発見につなげるための研究成果の発信、共有のあり方について、また地域振興に資する研究成果の活用の方法について、日本関連在外資料を例に研究者と行政関係者、観光業界がともに考えるものである。

● 在外資料事業

この事業は、国際日本文化研究センターを事業統括組織として（統括班）、以下の4つの研究プロジェクトより構成される。

- 1) 「ハーグ国立文書館所蔵平戸オランダ商館文書調査研究・活用」（国際日本文化研究センター）：略称「平戸プロジェクト」
- 2) 「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用-日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築」（国立歴史民俗博物館）：略称「ヨーロッパ・プロジェクト」。
- 3) 「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・活用」（国文学研究資料館）：略称「マレガ・プロジェクト」。
- 4) 「北米における日本関連在外資料調査研究・活用-言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」（国立国語研究所）：略称「北米プロジェクト」。

事業統括を担当する統括班は、上記4プロジェクトを横に連携するとともに、歴史的・地理的な軸によって4つのプロジェクトを縦断・横断する視野を確立し、個別の学術成果をより効果的に国内・国外の学会に益するように活用するとともに、これにより広く国内外の社会一般への普及につとめる。そして、これを通じて、海外の若手研究者の問題意識に点火すること、日本に関する情報の国際的流通のありさまを歴史的・地理的に復元するとともに、日本国外になお埋もれている未発見の資料、未研究の文書などの将来の発見に向けて、研究者の関心を高め、合わせて複数の国家や言語、文化圏に跨る研究者集団の構築を目指す。

今年度は、国際的・学際的・総合的なアプローチによる資料活用の実績を効果的にあげるため、リスボンで開催予定の欧州日本学研究集会の機会を利用し、「マレガ・プロジェクト」を中心とする学会発表パネルが準備されている。これを活用して、同研究集会に参集する外国の日本研究者に、「在外資料プロジェクト」の進捗状況を説明し、将来の計画実現にむけた参画を促し、国際的協力体制を強化する。これは南蛮時代以降の世界的な海上交易との相関で在外資料を位置づける試みとなる。これらを踏まえ、移民の歴史的・地理的な研究との相関において、日本関係在外資料を有機的・立体的に把握し、位置づけ、それによって研究計画をさらに発展することを、視野にいれている。

オランダ人と平戸との出会い

国際日本文化研究センター 准教授 フレデリック・クレインス

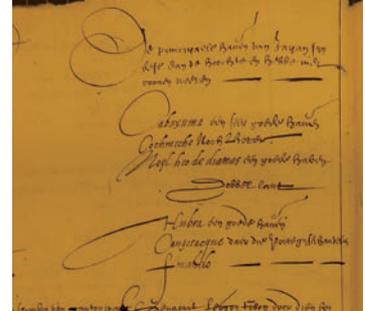
● はじめに

本発表では、初期の平戸オランダ商館文書を元にオランダ人と平戸との出会いの経緯を再現する。

● 平戸オランダ商館文書とは

1609年に設立された平戸オランダ商館は、1641年に長崎へ移転されるまで、オランダ東インド会社の日本における外交・貿易活動の拠点であった。平戸オランダ商館では様々な文書が作成され、公務日記を初め、送受信書簡、決議録、仕訳帳、送り状、注文書等が現存しており、オランダのハーグ国立文書館に保管されている。これらの文書は江戸初期の対外関係史研究にとって情報の宝庫である。平戸オランダ商館文書の内、これまでほとんど研究されてこなかった1609年～1633年の間に作成された往復書簡や決議録など約2000頁分について和訳し、その内容分析を行うことを目的として研究プロジェクトを行っている。

● 日本への渡航以前にオランダ人が持っていた日本に関する地理的知識



○リンスホーテン『東方案内記』1596年刊（左図）

日本についての情報を初めてオランダ人に伝えた書物。複数のポルトガル人による日本への航海誌のオランダ語訳および日本地図を掲載。

○東インド会社が初期に利用したアジアの地図（17世紀半ば、中央図）

九州が日本の玄関口として認識されている。

○ファン・ソルトによる日本情報の収集（右図）

パタニで中国貿易と日本貿易に関する情報収集を行っていた東インド会社商務員のファン・ソルトの書簡に日本の港についての情報が記載されている。日本に初めて東インド会社の船を派遣したフェルーフ提督関連文書にこの書簡の写しが含まれている。

○日本に定住していたリーフデ号の元乗組員の内、元船長クワッケルナックおよびファン・サントフォールトが1605年に家康から受け取った朱印状を持ってパタニへ渡航し、同地のオランダ商館長に日本についての情報を口頭で伝えた。

● 日本への渡航の決定

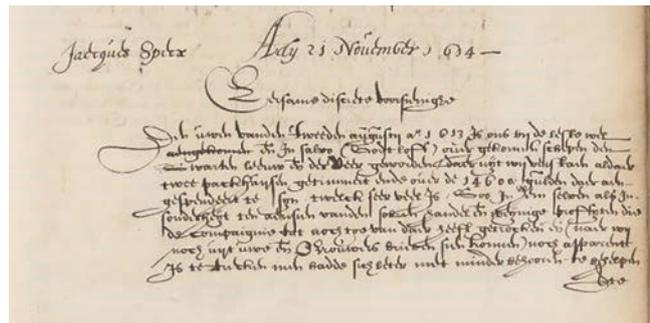
東インド会社の初期のアジア進出政策において日本との貿易は重視されていなかった。しかし、1609年にスペインとオランダとの間に12年停戦条約が締結されたため、その適用に先立って出来るだけ多くのアジアの国々と条約を結ぶ必要があった。そのため、オランダ人は急遽日本にも二隻の船を派遣した。

● なぜ平戸か

日本に向かうことになった二隻のオランダ船の日記や決議録には「平戸へ向かう」と明記されている。それ以前にクワッケルナック等がパタニに渡航した際のジャンク船は、平戸藩主松浦鎮信がすべての費用を負担し、便宜を図った。このように鎮信はオランダ船を平戸へ招き、オランダとの貿易を推進しようとした。

● 平戸でオランダ商館を建てる

初代商館長スペックスは平戸でオランダ商館と倉庫を建て（左図）、その費用は14600ギルダーに上ったが、東インド会社の十七人会よりスペックスに宛てた書簡（右図）の内容から、その建設は東インド会社の政策に違反していたことが分かる。というのも、東インド会社は初期において日本を重視しておらず、とりあえず建物を借りるのに留めるべきであると考えていた。



● 平戸に留まる決定

第二代商館長ブラウエルが1613年に家康に謁見した際に、家康は浦賀に商館を移すように要請するが、ブラウエルはそれを断っている。その理由として次の二つを挙げている。

- 1) すでに商館の建物を建てたので、移転する場合に無駄な費用がかかること
- 2) 平戸藩主をはじめ、地元の人々がオランダ人に好意を示していること

● 結論

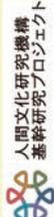
このようにして、松浦鎮信の働きによりオランダ人が平戸を日本の拠点として選び、平戸の人々と良い関係を築きながら、平戸に定着していく。この選択とその後に築かれた良好な関係は主に平戸藩主と初代商館長スペックスの功績であったと言える。

leet soude zijn / dan dat wy ons te vertrouwen hadden / niet min als in ons. Want getraecteert te souden zijn / seggende Firando Hollandt te zijn: Doorders nae deel uptnemende vrientschappen / ons afschept ghenomen / ons sendende daer nae eenige vaetjens Japannische Wijn / om op de Kepsse mede te nemen.

【1611年のスペックスの参府日記より】

平戸はオランダであるから〔平戸に残ったオランダ人が〕オランダに劣らぬ厚遇を受けるので安心するようにと〔平戸藩の家臣が言っていた〕。さらに、多くの友情を示してくれた後で別れたが、その後で道中に持っているための数樽の日本酒を送ってくれた。


 大学共同利用機関法人 人文科学研究機構
 国文学研究資料館
 National Institute of Japanese Literature


 人間文化研究機構
 基幹研究プロジェクト

海を渡った切支丹禁教文書 1万点の可能性

ーバチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用ー

人間文化研究機構 国文学研究資料館
 大友 一雄

1


 国文学研究資料館
 National Institute of Japanese Literature

1. 基礎情報：バチカン市国と世界のキリスト教徒

バチカン市国：世界最小の面積
 世界に約12億人のカトリック信徒




2


 国文学研究資料館
 National Institute of Japanese Literature

1. 基礎情報：マレガ・プロジェクトとは

- 2011年、ローマ教皇庁バチカン図書館で、切支丹関係資料、とくに禁制に関する文書群1万数千点が発見された。
- バチカン図書館は日本へ調査協力を求め、2013年11月、人間文化研究機構が協定を締結 一内外の研究者参加
 - 保存・修復管理に関する技術支援、全文書のデジタル画像化、目録画像データベースの作成公開を基本とする。
 - その研究成果の活用を通じた教育・社会貢献
 - 歴史的文書の保存修復などを通じた日本の歴史的文化的発信
 - キリスト教を伝来をめぐる他国間比較
 - 地域研究の進展を目的とする。

3



1. 基礎情報：マレガ神父とは

マリオ・マレガ Mario Marega

- 1902年9月30日イタリア北東部フリウリ地方ゴリツィア生
- サレジオ会の神父
- 1929年、宣教師として来日、戦前戦中大分県で布教活動
- 1938年、『古事記』イタリア語訳を出版
- 1938年頃、切支丹関係古文書を収集
- 1942・1946年、『豊後切支丹史料』正・続を出版
- 1953年、切支丹関係文書をバチカン図書館に寄贈
- 1978年1月30日イタリアのロンバルディア州ブレッシアで没

詳細は、プロジェクトHP—<https://www.nijl.ac.jp/pages/research/marega01.html>

5

2. プロジェクトについて：マレガ文書とは

- 大半が新出、未整理の文書群（1万数千点）
 - ①主に豊後国臼杵藩（現大分県臼杵市）の宗門方の文書群、岡藩関係もあり。
 - ②マレガ神父が古書店などから購入した古文書類
 - ③マレガ神父の手稿・原稿・メモなど

6

2. マレガ文書の魅力

江戸幕府・臼杵藩の切支丹統制略年表

慶長8年(1603) 江戸幕府成立
 慶長17年(1612) 幕府禁令。臼杵藩は野津・高田の宣教師追放
 慶長19年(1614) 高山右近国外追放 12月マニラ到着翌年1月死去
 寛永12年(1635) 臼杵藩、転び切支丹から南蛮監詞。寺請制度導入
 寛永15年(1638)2月、島原・天草一揆が鎮圧
 寛永18年(1641)5月、諸大名・旗本などに領内の切支丹改を指示
 正保3年(1646)、臼杵藩全領民を対象とする五人組制度・寺請制度を導入
 明暦3年(1657)、幕府宗門改役 正式設置 大目付井上政重就任
 万治～寛文年間、臼杵藩など十数年間にわたり切支丹教百名捕獲・処罰
 万治1年(1658)、幕府宗門改に大目付北條阿波守氏重就任
 万治2年(1659)、幕府、諸大名に五人組制度・寺請制度の導入指示
 (切支丹改のみならず民衆支配・幕藩関係においても重要政策)
 寛文2年(1662)、幕府宗門改に作事奉行伊田若狭守宗雪就任
 寛文4年(1664)、幕府、藩に宗門改役の設置指示、臼杵藩宗門改設置
 寛文11年(1671)、宗門人別改帳の法整備がなされ、寺請制度完成
 延宝2年(1674)、幕府告訴の最高額を銀500枚
 延宝5年(1677)、臼杵藩、長崎奉行から踏絵を借用し、隔年実施

7

3. 日本にわたってのマレガ・プロジェクト

○貞享4年(1687)、幕府「類族令」を布達 棄教子孫を管理

- 男は6代まで、女性は3代まで(切支丹類族調べ)
- 幕府へ年2回異動届 (類族帳、類族系図の作成)

<男> 本人(転び)→子→孫→曾孫→玄孫→来孫→昆孫
 <女> 本人(転び)→子→孫→曾孫

*「切支丹改」は「宗門改」制度として整備され、領内全戸を対象とする家・人管理の制度として定着。類族改め制度導入理由は？
 正徳元年(1711)臼杵藩 本人・本人同然388人存命
 類族 1万4865人存命

○元禄元年(1688)、臼杵藩踏絵を毎年実施

8

シーボルト・コレクションの長崎くんち衣裳 ——ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用——

国立歴史民俗博物館 准教授 澤田和人

「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用」は、19世紀に収集されたことが確実なヨーロッパに現存する日本関連資料コレクションのうち、その時代を代表する大規模なコレクションの調査をおこない、データベース公開、展示、シンポジウム、教育プログラム等の方法により、効果的に活用するものである。

本プロジェクトの核の一つとなっているのは、「ウィーンを中心としたシーボルト（子）収集日本関係資料の調査研究」である。これは、2010～15年度に取り組んできた「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」を継承し、発展させたものである。幕末期に来日し、日本研究者としてよく知られているフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトと、彼の息子のハインリヒが収集した日本関連資料（シーボルト・コレクション）に焦点をあてた両プロジェクトの成果の一端は、昨年度から各地を巡回して開催している展示「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」として一般への還元を果たしている。ここでは、その展示に出陳している資料に検討を加え、活用へとつながる潜在力を浮かび上がらせてみたい。

● シーボルト・コレクションの長崎くんち衣裳

本報告でとりあげるのは、ミュンヘン五大陸博物館が所蔵する長崎くんち衣裳である。シーボルトは2度にわたって来日したが、ミュンヘン五大陸博物館には2度目に来日した際に収集されたコレクションが多く収蔵されている。長崎くんち衣裳も、2度目の滞在時の収集にかかり、合計で16点を数える。そして、これらの衣裳について、シーボルト自身は、1860年の祭礼で使用されたものと記録している。

16点の長崎くんち衣裳は、形状から3種に分類できる。いずれも大きさから子ども用の衣裳である。そのうちの1種は、筒袖タイプの上着であり、丸頸の詰め襟でボタンのついた特異な形状をしている（図1）。この形状の上着は、現在の長崎くんちの衣裳に継承されている。万屋町の「鯨の潮吹き」、および、麴屋町・榎津町・油屋町・八坂町・東古川町・魚の町・船大工町の「川船」において、子どもたちが務める船頭の衣裳が同様の形状をしており、明らかにつながりが認められる。ただし、大きな相違もある。それは、シーボルト・コレクションの衣裳がすべて赤地であるのに対し、現在の衣裳が多くは白地であることである。

江戸時代の長崎くんちについては不明な点が多いが、船頭衣裳の特異な形状は、シーボルトの1度目の来日（1823～30年）と2度目の来日（1859～62年）の間に成立した可能性が高い。その母体となった衣服は、大坂手甲と推測される。大坂手甲とは、上腕から手までを覆う手甲の一種であるが、左右が肩でつながり、丈の短い上着のような形状をしている。シーボルトと同時代の長崎では、漁師たちが大坂手甲を身につけていた。それは、シーボルト・コレクションに含まれる川原慶賀筆「人物画帳」（ミュンヘン五大陸博物館蔵）などから確認できる。「人物画帳」の漁師の大坂手甲は茶色っぽく彩色されているが、これは柿色を表現している。1827年の長崎くんちに関する記述を併せ鑑みると、柿色が漁師の服装を象徴しており、それが転化してシーボルト・コレクションに見るような赤地の衣裳になったと考えられる。つまり、赤地が本来的な地色となる。

大坂手甲は芸能の衣裳としても用いられている。19世紀に入り、歌舞伎において船頭が登場する演目が人気を集めるようになってくる。歌舞伎の船頭の衣裳のひとつに、大坂手甲があった。そうした歌舞伎との関係も、視野に入れる必要があろう。

● 長崎所在の長崎くんち衣裳

ハイブリッドのコレクションを調査している折に、新たに父親のコレクションがミュンヘン五大陸博物館で発見された。それは、長崎くんちの船頭衣裳を着せた三つ折人形である(図2)。人形自体はごく一般的なものであり、見本を後世に伝えるべく制作した雛形の船頭衣裳を着せかけたものと思われる。この雛形の船頭衣裳と上記の衣裳とを比べると、両者には若干の相違があることに気付く。それは、雛形の衣裳では上部しかボタンを留めてない点である。

大坂手甲は、そもそも手甲であるため、ボタン留めは上部にしか必要がなかった。すなわち、人形が着る雛形の方が、大坂手甲の本来性を示し、より古態を伝えていると見なされる。この観点からすると、長崎歴史文化博物館が所蔵する1点の船頭衣裳が注目される。その衣裳は、上部のみのボタン留めとなっており、やはりシーボルト・コレクションのものよりも古態を備えていると考えられる。推定される船頭衣裳の成立期からすると、草創期に近い頃の形態の作と言えよう。長崎歴史文化博物館の所蔵品は、見過ごすことができない重要な作例として、改めて照射しなければならない。



図1 長崎くんち衣裳 左：正面 右：背面



図2 三つ折人形 左：正面 右：背面

ニッケイ社会で生み出された資料から見た 日本の言語文化

国立国語研究所 准教授 朝 日 祥 之

1. はじめに

19世紀末以降、日本人による日本から海外に向けた移動は本格化する。植民として、移民として世界各地に移り住んだ人たちは、現地社会で受け入れられるべく、生活様式や自身のアイデンティティを適応させていく。そのプロセスにより、移民社会の間で「ニッケイ社会」が形成された。ニッケイ社会における日々の生活において、さまざま面において、日本語・日本文化を垣間見ることができる。本講演はそのようなニッケイ社会の言語文化に見られる特性から、海を渡った日本の文化の一側面について考察する。

2. 海を渡った日本人

まず、日本各地からどれくらいの人が世界に渡ったのであろうか。図1は拓務省によって作成された世界分布図である。昭和12年10月時点で120万人を超える人たちが海外に移住していることがわかる。その多くは東アジアをはじめとして、東南アジア、オセアニア、南アジア、太平洋島嶼部、北南米に渡っている。

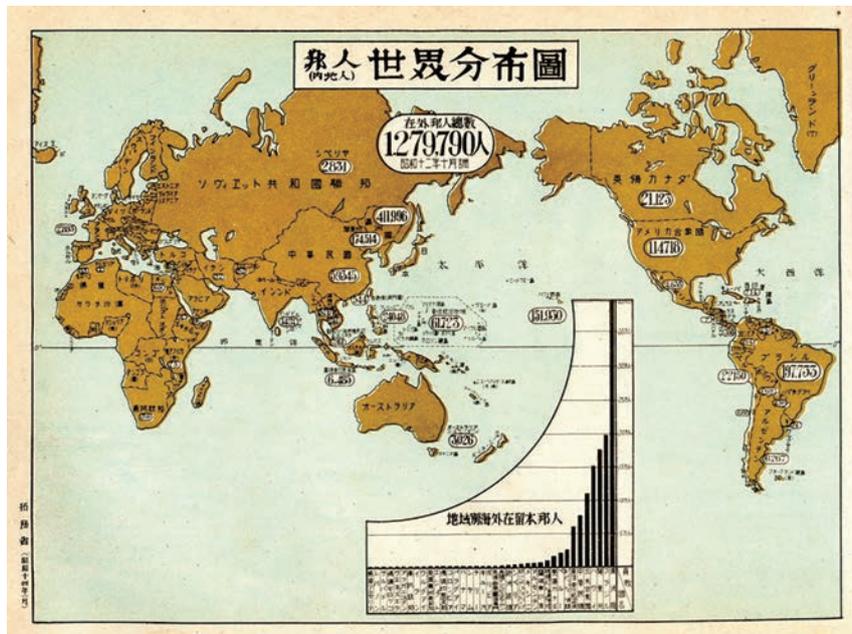


図1 世界各地の日系コミュニティと人口（1937年時点）（拓務省1938）

これらの地域で生活する人たちの出身地構成は、沖縄県、広島県、高知県、山口県、和歌山県などの地域を始めとして、日本各地の人たちが生活している。ただ、その構成比は移住地によってそれぞれ異なり、その出身地構成によって現地で形成される日本語文化に違いが生まれることが考えられる。

3. 日本語の特徴

ここで、彼らの使う日本語の特徴を実際の音声や映像を使って紹介したい。ここで紹介する映像は、(1) 全米日系人博物館により収集された資料、(2) ハワイ日本文化センター所蔵の映像資料、(3) 沖縄県公文書館所蔵のものである。これらの音声・映像資料からわかることは、彼らの使っている日本語は、話者の出身地、職業などの違いにより、その違いが見られる。その違いは方言の違い、共通語の使用、敬語の使用・不使用といったものである。日本からの移住者の多いニッケイ社会においては、その日本語の使用される幅も広いことが言えそうである。

4. 写真にみるニッケイ社会の日本語・日本文化

ニッケイ社会における日本語・日本文化は音声・映像資料以外にも垣間見ることができる。日本語新聞や雑誌などももちろん該当するが、ニッケイ社会における食材や公共掲示などにおいてもその特徴を把握することができる。例えば、現地で売られている「味噌 misso」や「弁当 bento」「寿司 sushi」など、ニッケイ社会の食文化の一部に取り込まれているようなものもある。その中でもブラジルで売られているこの「味噌 misso」(図2)には「赤味噌 misso」と「白味噌 shiro misso」の2種類が売られている。言語的に見ると、「赤味噌」が無標 (unmarked) であり、「白味噌」が「白 shiro」を「味噌 misso」につけくわている点で有標 (marked) と言える。日本においてもどの種類の味噌が売られているかは地域によって異なる。この分布と味噌の分布との関係を探るのは大変興味深い。



図2 「赤みそ」と「白みそ」(サンパウロにて)

5. おわりに

このように海外に形成されたニッケイ社会には日本とのつながりを実感できるものが数多く残されている。現地で独自に変容した日本語・日本文化を見つめ、その特徴を記録していくことがまず必要である。今後もこれらの特徴がさらなる変容を見せていくことが考えられる。その変容がいかなるものであっても、現地の文化と日本の文化をつなぐものであることには変わりはないであろう。

参考文献

拓務省『拓務要覧昭和13年版』拓務省、1938年

講師紹介

講演 1 フレデリック・クレインス

[国際日本文化研究センター 准教授]

- ・『日蘭関係史をよみとく（下巻） 運ばれる情報と物』臨川書店、2015年（編著）
- ・『十七世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店、2010年
- ・『江戸時代における機械論的身体観の受容』臨川書店、2006年

講演 2 大友 一雄

[国文学研究資料館 教授]

- ・「民間所在の記録史料と戦後の「国立史料館」構想」『社会変容と民間アーカイブズ』勉誠出版、2017年（国文学研究資料館編、共著）
- ・『江戸幕府と情報管理』臨川書店、2003年（国文学研究資料館編）
- ・『日本近世国家の権威と儀礼』吉川弘文館、1999年

講演 3 澤田 和人

[国立歴史民俗博物館 准教授]

- ・『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』青幻舎、2016年（国立歴史民俗博物館監修、共著）
- ・「ミュンヘン国立民族学博物館所蔵シーボルト・コレクションの染織品」『シーボルトが紹介したかった日本 — 欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために—』人間文化研究機構、2015年（国立歴史民俗博物館編、共著）
- ・『野村コレクション 服飾Ⅰ・Ⅱ』国立歴史民俗博物館、2013・2014年（編著）

講演 4 朝日 祥之

[国立国語研究所 准教授]

- ・『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』東京堂出版、2015年（朝日祥之・原山浩介共編）
- ・『サハリンに残された日本語権太方言』明治書院、2012年
- ・『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』ひつじ書房、2008年

パネリスト 紹介

稲賀 繁美

[国際日本文化研究センター 教授]

専門分野：モダニズム、ジャポニズム、オリエンタリズム、異文化コミュニケーション

- ・『海賊史観からみた世界史の再構築——交易と情報流通の現在を問い直す』思文閣出版、2017年（編著）
- ・『接触造形論——触れあう魂、紡がれる形——』名古屋大学出版会、2016年
- ・『絵画の臨界：近代東アジア美術史の桎梏と命運』名古屋大学出版会、2014年

岩崎 義則

[九州大学 人文科学研究院 歴史学部門 日本史学講座 准教授]

専門分野：近世大名文庫、近世日本銅流通史、近世大名随筆

- ・「五島灘・角力灘を舞台とした18～19世紀における潜伏キリシタンの移住について」『史淵』150、pp. 27～67、2013年
- ・『長崎県の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書 資料編3』長崎県、2013年（共著）
- ・『東アジア世界の交流と変容』九州大学出版会、2011年（森平雅彦・岩崎義則・高山倫明共編著）

河野まゆ子

[株式会社JTB総合研究所]

コンサルティング事業部コンサルティング第1部 主任研究員]

専門分野：観光計画・戦略策定、インバウンド、文化財活用

- ・観光振興計画、観光整備計画等策定支援業務（日南市、那覇市、宇都宮市、大町市ほか）
- ・文化庁文化財を中核とする観光拠点形成オンライン講座（gacco）『文化財保護と親和性の高い観光地としての仕組みづくり』2017年
- ・第3回世界遺産サミット実行委員会キースピーチ『「世界遺産」の観光訴求力と受入体制整備の取組』2016年
- ・講演『訪日旅行者の潮流を踏まえた外国人受入体制整備に向けて』白杵市、2016年

佐藤 晃洋

[大分県教育庁 参事監兼文化課長]

専門分野：日本近世史、大分県地方史、幕領における支配構造

- ・「近世日本豊後のキリシタン禁制と民衆統制」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第12号、2016年
- ・「マレガ文書にみる白杵藩キリシタン禁制政策開始期の文書」『東京大学史料編纂所研究紀要』第26号、2016年
- ・「白杵藩におけるキリシタン禁制政策確立後の文書」『大分県地方史』第227号、2016年

佐野真由子

[国際日本文化研究センター 准教授／長崎県立大学 地域創造学部 教授]

専門分野：外交史・文化交流史、文化政策

- ・『幕末外交儀礼の研究——欧米外交官たちの將軍拜謁』思文閣出版、2016年
- ・『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版、2015年（編著）
- ・『オールコックの江戸——初代英国公使が見た幕末日本——』中公新書、2003年



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構



人間文化研究機構

基幹研究プロジェクト

第30回 人文機構シンポジウム

「海の向こうの日本文化

— その価値と活用を考える —」 要旨集

発行日 平成29年6月3日

編集・発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-3-13

ヒューリック神谷町ビル2階

TEL 03-6402-9200 (代表)

<http://www.nihu.jp/>
